

報 告

第 59 回日本歯科理工学会学術講演会報告

平成 24 年度春期第 59 回日本歯科理工学会学術講演会が、徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部生体材料工学分野教授、浅岡憲三先生を大会長として、2012 年 4 月 14 日・15 日に徳島県徳島市のあわぎんホール（徳島県郷土文化会館）にて開催された。本大会における一般講演の演題数は、口頭発表 35 題、ポスター発表 98 題の計 133 題であった。また、Dental Materials Adviser/Senior Adviser 特別セミナーを兼ねた 4 題の特別講演および 10 社の企業展示が開催された。

大会前日、夕刻より小雨が降りはじめ大会会期中の天気が心配されたが、翌日には雨も上がり、桜咲く春の陽光の中、学術講演会がスタートした。

大会初日の口頭発表では、大会長自らの講演を皮切りに、鑄造・金属材料、器械・臨床応用、有機材料、床・歯冠材料に関する 17 題の講演が行われた。ポスター発表では 6 題の研究奨励賞応募講演と生体反応、生体親和材料、臨床応用、器械・技術をテーマとした 50 題の講演が行われた。口頭発表・ポスター発表ともに熱心な質疑応答が行われた。

午後からは総会が開催され、本年度より日本歯科理工学会会長に就任された埴 隆夫会長より、常任理事の紹介と法人化に向けた今後の学会の運営方針について説明がなされた。その後、特別講演が行われ、まずはじめに日本歯科理工学会名誉会員であらせられる中林宣男先生が「歯科理工学会が将来の歯科医学の進歩に貢献する対策」と題して講演された。歯の組織の研究をもっと真剣

に行う必要性や、歯質と修復物の接着強さは材料の引張強さ測定法を準用すべきであることなどを解説され、予防歯科学の大切さを結論とされた。日本大学客員教授の菅原明喜先生は「New generation self-hardening calcium phosphates による骨再生のメカニズムと臨床応用」と題して、近年開発された self-hardening calcium phosphates (SHCP) を例にして、骨再生に関する種々の問題点、SHCP における骨再生の基本的概念と臨床応用について述べられた。

夕方からは、阿波観光ホテルにて懇親会が開催された。日本歯科医学会の江藤一洋会長からのご祝辞では、日本歯科理工学会からもっと多くの歯科材料の開発に関わる研究を望むとの叱咤激励を頂いた。

大会二日目の口頭発表では、生体親和材料、細胞・毒性、無機材料に関する 19 題の講演が行われ、ポスター発表では、金属材料、コンポジットレジン・シーラント、床用材料、接着、セメント、セラミックスに関する 48 題の講演が行われた。

午後からの特別講演では、海外から講師の先生をお招きし、「Scaffolds and delivery systems for bone and tooth regeneration」と題して Hae-Won Kim 先生に、「Calcium silicate-based composites for bone graft substitute」と題して Shinn-Jyh Ding 先生に講演を頂いた。英語による活発な質疑応答が行われた。

本学術講演会は、浅岡憲三大会長、浜田賢一準備委員長をはじめ多くのスタッフの多大なるサポートにより、滞りなく盛況の内に終了した。本大会運営に関わったすべての方々に感謝を申し上げ、第 59 回日本歯科理工学会学術講演会の報告とさせていただきます。

都留 寛治

(九州大学大学院歯学研究院生体材料学分野)

